



Title	明治・大正期の国立博物館が収集した鳥類標本史とその現代的意義に関する研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	浅井, さやか
Citation	北海道大学. 博士(農学) 甲第14801号
Issue Date	2022-03-24
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/85311
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Asai_Sayaka_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要旨

環境資源学専攻： 博士（農学）

氏名 浅井 さやか

学位論文題名

明治・大正期の国立博物館が収集した鳥類標本史と その現代的意義に関する研究

自然史研究に利用される標本は、採集された生物がその日、その場所で生息していた証拠であり、研究結果を保証する役割をも担う場合がある。歴史の古い標本は、添付されたラベルから十分な採集情報が得られないことが要因で、研究資源としての利用価値が低いものとして扱われることがある。しかしながら、採集情報が失われたとされる標本であっても、標本台帳や採集者のフィールドノートなどから帰属する標本群（コレクション）の成り立ちや採集者の背景を調べることで、復元できる情報があり、利用価値が低いとされていた標本の価値を向上させることができる。本研究では、東京国立博物館の前身である東京帝室博物館（帝室博物館）が旧蔵していた鳥類標本コレクション（帝室博物館コレクション）を対象に、コレクションの歴史的経緯を明らかにすることで、各標本の採集情報を復元、あるいはその正確性を再検証し、標本の学術的価値を向上させることを目的とする（第1章）。

山階鳥類研究所（山階鳥研）には、日本の鳥類標本コレクションとしては最大の 70,000 点以上が所蔵されている。この中には、3,300 点を超える帝室博物館コレクションの一部（YIO-IH 標本群）が含まれている。YIO-IH 標本群は、ラベルの紛失、汚損、破損によって標本情報が得られない場合や、ラベルの記載が筆記体などで読み取りにくく、誤読によって正確な情報を得られていない場合があることから、採集年代や採集地が明確でない標本が多く、研究に利用しにくいという問題があった。これらの問題を解決するために、第一段階として、帝室博物館コレクションの歴史的背景を検討した。その結果、帝室博物館コレクションは、東京国立博物館と国立科学博物館が明治・大正期に収集した標本が統合した標本群であり、収集経緯によって次の3つの標本群に分けられた。

(1) 東京国立博物館が設立した 1872（明治5）年から 1889（明治22）年までに同館の前身が収集した標本群。

(2) 国立科学博物館が設立した 1875（明治8）年から 1890（明治23）年までに同館の前身が収集した標本群。

(3) 2つの博物館の標本が統合した 1890（明治23）年から帝室博物館天産部が廃止された 1923（大正12）年までに東京国立博物館の前身が収集した標本群。

これにより、YIO-IH 標本群は帝室博物館コレクションの収集が終了した 1923 年時点の 83.0% にあたる標本群であること、採集年代が不明確であった多数の標本の採集情報を確定することができた（第2章）。

帝室博物館コレクションの各標本の情報をより明確にするため、第二段階として、YIO-IH 標本群の海外の博物館由来標本について、入手経緯などの背景を検討した。その結果、スミソニアン国立博物館（スミソニアン）由来標本は、1877年に東京国立博物館および国立科学博物館、1887年に国立科学博物館にスミソニアンから送付された計 1,321 点の標本から成立したもので、YIO-IH 標本群には 1,306 点（98.9%）が含まれていた（第3章）。

オーストラリア博物館由来標本は、1888年に国立科学博物館、1893年に東京国立博物館へ送付された2ルートによって、計 329 点が送付されていた。YIO-IH 標本群には送付された標本のほとんどである 326 点（99.1%）が確認された（第4章）。また、フランス国立自然史博物館由来標本

は、1877年に同博物館から国立科学博物館へ104点が送付され、YIO-IH 標本群からは82点(78.8%)が確認された(第5章)。

加えて、海外の博物館由来標本の検討過程で、YIO-IH 標本群の各標本と照合できる旧蔵機関の標本台帳などの資料が見出された。これらによって、採集地や採集者の特定や採集年代の復元が可能になった。また、復元された採集情報を利用することで、種が確定されていなかった標本の種同定や、過去における研究利用の記録、現在発信されている国際データベース情報の誤りの修正も可能となった(第3, 4, 5章)。

海外の博物館との交換標本とは別に、明治期に南鳥島で採集された標本の歴史的背景の検討では、1902年に起きた南鳥島事件に関連して東京国立博物館(皇室博物館)に寄贈された標本であったことが判明した。現存する26点は、ラベルから寄贈年次と、一部の標本では南鳥島産である情報が得られていたが、全体に採集日は不明で、中には採集地が不明確な標本も存在していた。皇室博物館の標本台帳や受け入れ時の記録を精査することで、26点が南鳥島産であること、また寄贈者が上滝七五郎、秋元秀太郎と特定することができた。採集期間は、彼らの活動背景から、上滝寄贈の12点は1900年から1902年10月9日、秋元寄贈の14点は1902年7月28日から8月29日と推定することができた。標本入手当時の明治期の南鳥島には、11種の海鳥が繁殖していたが、海鳥の乱獲や環境の悪化などで9種の繁殖集団が消滅した。皇室博物館コレクションの南鳥島産標本の中には、消滅した繁殖個体群の標本が残されており、これらは南鳥島で消滅した繁殖個体群を解明する有効な研究資源になり得る(第6章)。

本研究により、現存する皇室博物館コレクション3,454点の約半数(50.5%)にあたる1,743点(スミソニアン由来標本1,306点、オーストラリア博物館由来標本329点、フランス国立自然史博物館由来標本82点、南鳥島産標本26点)の歴史的背景が明確になり、標本情報を復元することができた。この成果は、これまで知られていた標本の情報を大きく修正、補うものであり、標本の研究資源としての価値を向上させた。

皇室博物館コレクションのうち、東京国立博物館の収集標本は、外交や社会的な出来事によって収集された傾向があった。また、国立科学博物館の標本は、海外の博物館との学術交流によって入手したり、国内の標本は採集によって得ていたことから、学術研究の目的で収集された傾向があり、明治期の国立博物館の活動の特徴や相違をうかがい知ることができた。日本の博物館の創設から収集された皇室博物館コレクションは、博物館史の証拠となる歴史資料にもなり得た。特に国立科学博物館が伊豆諸島や琉球列島で採集した鳥類標本は、新種記載に用いられたタイプ標本を含み、日本の鳥学の草創期を支えていた。

標本の採集情報が復元されたことで、皇室博物館コレクションは世界各地の鳥類標本を有していたことが明らかになった。また、国内で屈指の歴史の古い標本群であった。皇室博物館コレクションには、北米のカロライナインコや南西諸島のリュウキュウカラスバトなど絶滅鳥の標本が含まれていたが、どの種も入手時には絶滅しておらず、時間が経過した結果として、絶滅種や地域絶滅の種の標本を含む標本群になっていた。温暖化など環境の変化が著しい昨今では、地域絶滅は増加していくと予想され、皇室博物館コレクションは、現代との比較において有効な研究資源になるなど、その価値は今後ますます高まると考えられる(第7章)。